

母の714 ひろば

doshinsha / haha no hiroba

道草日記④／大野八生 2

作者が語る「14ひきのシリーズ」⑤／いわむらかずお 3

子どもの権利をまもるために何が必要か

～こども基本法で何が変わり

私達はどう変わるべきなのか／甲斐田万智子 4

作家と画家がであうとき⑫／吉田尚令 6

「あかちゃん ととととと」シリーズ最新作！／岩田亜紀 7

イラスト／nakaban



ぼくは日本が好きだが、日本はぼくが嫌いなようだ 小手鞠るい

.....

アメリカで暮らすようになって、30年あまりが過ぎた。渡米したばかりの頃、ふとしたきっかけで知り合い、以来ずっと、仲のいい友だちだった人が今年の夏に亡くなった。まだ、彼の死を受け入れることができない。今はちょっとどこかへ出かけているだけで、そのうち戻ってきてくれる——そんな気がしてならない。

友人の名前は、チェイさん。出会った日、彼は私に、こんな風に自己紹介をしてくれた。「ぼくは、日本で生まれて日本で育ったザイニチだ。自分では自分を日本人だと思っている。母国語は日本語で、ずっと日本の学校へ通っていた。韓国語は、まったくできない。あなたの本は、すらすら読めるよ。ぼくは日本が大好きなんだ。日本人も大好きだ。でも、日本も日本人も、ぼくのことをあんまり好きじゃないみたいだね。日本はぼくが嫌いなようだ。だから生まれ育った祖国を出てきた」

そう言って、彼は「わははは」と、豪快に笑った。高倉健を思わせるような、実にダンディでかっこいい人だった。

ザイニチとは「在日朝鮮人」「在日韓国人」の通称であることは、知っていた。けれど、この言葉が本当に意味していることはなんなのか、真剣に考えたことはなかった。私は彼と親しくなるにつれて、そのことを恥じるようになった。日本国内で、理不尽に差別されている人たちがいる。なぜなのか。日韓の関係や歴史に、きちんと目を向けてこなかった私は、無責任な日本人である、とも思った。「いつか、ぼくの話の小説に書いてくれないかなあ。本当に面白い小説になるよ。ぼくが日本でどんな目に遭って、どうやってアメリカへやってきて、ここでひと旗あげて、アメリカンドリームを実現させたか。これは『あるザイニチの奇跡の物語』になるよ」

彼が経営していたベッド・アンド・ブレックファストを訪ねて、いろいろな話を聞かせてもらった。私は彼のライフストーリーを、子どもたちに向けて、書きたいと思うようになった。日本の子どもたちに、彼の奇跡の物語を読んでもらいたい。日本が大好きだというチェイさんが、住みやすい日本になるためには、どうすればいいのか。

生まれたときから人を差別する人はいない。純粋な魂を持って生まれた赤ん坊を、差別主義者に仕立てていくのは常に大人である。大人であり、社会であり、国家である。偏見という鎖につながれることなく、ありとあらゆる差別から解放された日本社会。それを築いていくのは、日本の子どもたちに他ならない。

そんな思いをこめて書き上げた作品『空と星と風の歌』を、チェイさんに読んでもらえないことが残念でならない。

(こでまり るい／小説家)



道草日記 4

大野八生

(イラストレーター・造園家)

野の花屋

秋

が深まり、道端や空き地、土手などでは、背の高い野草たちが風に吹かれて、さわさわと心地良そうな季節になりました。

私の教えている絵の教室やワークショップなどで、季節ごとに野の花をモチーフに絵を描いていただくことが多く、草摘みをよくします。自然のままの草花たちを描いていただくのも良いのですが、見慣れている彼らを、ひとてまかけると、グッと引き締まるのです。

まず、枯れていたり傷んでいたりするところを取り除き、花器に入れたときに水に浸かる茎のところの葉を取り除きます。そして全体的に霧吹きでシュシュッと水をかけると生き生きとします。

それぞれの姿がわかるようにガラス瓶などに入れて並べます。まるで花屋さんのようです。ここから好きな草花を選んで絵を描いていただきます。

どれにしようかな？ と子どもも大人もとても楽しそうに選んでくれます。素敵な作品が描けたあとは、この野の草花たちを束ねてお土産にして差し上げます。

いつも見慣れている野草たちでも、見方を変えようと特別なものに変わります。花屋の時代も長かったので、私にとっても楽しいひとときです。

野の花屋さん、おうちでもどうですか？

(おおのやよい)



14ひきのぴくにつく

いわむらかずお／さく
1986年11月刊行

春です。おべんとうを作って、
みんなで野原へピクニック
へ! おひさまぼかほか、花
もいっぱい。

作者が語る 「14ひきのシリーズ」5 いわむらかずお



ふわふわ わたげ、どこ いくの? あおい そらに たんぼぼの たね、まきに いくの?

「14ひきのぴくにつく」

野山に花が咲いて実がなって——春は、野で暮らす者たちにはとても良い季節です。『14ひきのぴくにつく』では、そんな春の歓びを表現したいと思いました。

森の中で暮らしている14ひきたちにとって、野原に出ていくことは、それだけでよい気分転換になります。森の植物と、野原の植物の違いをよく見て、取材を進めていきました。

草花たちをよく見ていくと、たくさん発見がありました。例えば、ひと口に「たんぼぼ」と言っても、同じ種類でも生えている環境によって、成長の仕方や葉や花の形がずいぶん違うのです。

「ふわふわ わたげ、どこいくの? あおい そらに たんぼぼの たね、まきにいくの?」という文章があります。これは、野ねずみたちの視点になって、下からたんぼぼを見上げることで生まれた言葉です。野ねずみたちの目から見ると、綿毛が空に浮かんで見えるのです。上から見下ろしていただけでは出てこない言葉です。

たんぼぼは、花が終わるとぐいぐいと精一杯茎を伸ばして、その先に綿毛をひらきます。できるだけ遠くに自分の子孫を飛ばそうとする生き物としての意志なんですね。試しに測ってみると80センチも茎を伸ばしているたんぼぼがありました。小さな野の草花の生命力に感動しました。『ぴくにつく』は、身の回りの植物についてたくさん発見をもたらしてくれた一作でもあります。

前見返しには森に咲く花、後ろ見返しには野原の草花たちを図鑑のように描きました。これをしっかりとみてくれている子どもたちがたくさんいるようです。あるとき突然小さな子が「ウグイスカグラ」なんて言って、お母さんを驚かせたという話も聞きました。この絵本を読んで、野の草花への関心が芽生えてくれたらうれしいなと思います。

(まごめ・編集部)

子どもの声をきちゃんと聴くこと

皆さん、日頃、お子さんの声をどれだけ聴いていますか？「きちゃんと聴いています」と自信もって答えられますか。

私には三十三歳と三十一歳の娘がいます。子どもが生まれる頃から子どもの権利と子どもの声を聴くことの大切さを知っていたため、自分では精一杯娘たちの声を聴いているつもりでした。けれども実際は、全然足りていなかったということがわかったのは、娘たちが成人してからでした。なぜなら、娘たちは私に遠慮していたからです。「お母さんに心配をかけてはいけない」「お母さんは子どもたちを助ける仕事で忙しいから」と。まさか、そんな気遣いをしているとは夢にも思っていないでした。でも、実はそういう気遣いをして我慢している子どもたちがたくさんいます。その結果、一人で悩んで、心を病んで、耐えきれなくなる子どもたちがいるのだと思います。

報道されているとおり、二〇二二年度、子どもの自殺者数は最多の五百十四人となりました。その内訳は、小学生十七人、中学生百四十三人、高校生（全日制）二百五十九人、高校生（定時制・通信制）八十九人、高校生（特別支援学級）六人です（小学生は前年より六人増加）。子どもに悩みを打ち明けてもらえないまま、

子どもの権利を まもるために 何が必要か

～こども基本法で何が変わり
私達はどう変わるべきなのか

甲斐田万智子（かいだ・まちこ）

認定NPO法人国際子ども権利センター（シーライツ）代表理事。文京学院大学教授。専門分野は「国際協力」と「子どもの権利」。日本ユニセフ協会勤務を経て、ブータン、インドに滞在し、ストリートチルドレンや貧困少女たちにかかわる。2003年からカンボジアに4年滞在し、子どもの人身売買、性的搾取、児童労働の防止活動に携わる。著書に『きみがきみらしく生きるための子どもの権利』（KADOKAWA）などがある。



ある日突然子どもが命を絶ってしまった親の苦しみは想像もできません。つらい体験をしてきて死にたいと思ってきた、ある子どもは、保護された施設で「いまは死にたい気持ちはない。いろんな大人に話をちゃんと聴いてもらって、世の中悪い人ばかりでもないなって思った」と答えたそうです。

子どもの権利を守るということは、かんとんにいうと、子どもの声をきちゃんと聴き、その声を受け止めるということだと思っています。

「子どもの権利条約」批准と その反省

三十四年前の一九八九年に、子どもの権利条約が国連で採択され、その五年後の一九九四年に日本政府が批准しました。そのときに、私達は子ども観を一八〇度変え、子どもを一人の人間としてみなし、おとなと対等に子どもの意見をリスパクト（尊重）するようになるべきでした。しかし、子どもに権利を教え、子どもの声を聞いたりすると子どもはわがままになると思い込み、そうした大きな転換がないまま三十年がたちました。その結果、子どもの不登校は約三十万人になり、いじめは約六十万件になりました。NHKの調査によると、自死した子どもが亡く

なる前につぶやいた言葉で最も多かったのが、「学校に行きたくない」というものでした。学校に行きたくない（行けない）理由はさまざまでしょう。いじめはその大きな原因の一つと考えられますが、集団生活が苦手な子どももいるでしょう。

そういう子どもの一人ひとりの声に耳を傾けて、問題解決と一緒に考えたり、子どもが最も楽しく学べる場所を見つけたり、学校を一人ひとりの学びたいやり方で学べる楽しい場所にすることが求められています。

ストレスで自傷行為を起こす子どもも増加し、低年齢化しています。これまで私達は、子どもは何か言いたいことがあったら言うだろうという思い込みのもと、子どもに「どんどん意見を言っていんだよ」、「気持ちを表していんだよ」というメッセージを十分に伝えてきませんでした。その結果、子どもの権利条約で定められた原則四つのうちの一つである「子どもの最善の利益」を学校や社会で守ることができていません。すべての子どもが集団生活に合わせ、一斉授業についていけないといけない学校がはたして、子どもに最も良い環境となっているのでしょうか。子どもの権利条約のもう一つの原則である「差別的禁止」も十分に守られておらず、海外ルーツの子どもや

性的マイノリティの子どもが違いを受けいれてもらえず、差別によっていじめられています。

家庭ではどうでしょうか。子どもがそうした学校の悩みや、自分に自信が持てないことなどを相談したくても、忙しく余裕がない親には、ついためらってしまい、子どもは話ができなくなってしまう。そして、「これはあなたのためになる」と言っていて子どもの気持ちを十分に聴くことなく、勝手に子どもの生活や習い事、進路を決めていないでしょうか。

親（おとな）の方が経験があるから子どもにとって最も良いことが何かはわかっている、決めつけていないでしょうか。

子ども基本法とおとなたちが伝えていくべきこと

今年四月に施行された子ども基本法は、子どもの権利条約の四つの原則を定めています。特に三つ目の原則である「意見表明権」を重視しています。第三条で、「自己に直接関係する全ての事項に関して意見を表明する機会及び多様な社会的活動に参画する機会を確保すること」が定められ、第十一条では、「子ども施策の策定・実施・評価にあたって、子どもの意見を反映させるために必要な措置を講じなければならない」と定められました。

これは政府や自治体だけの責務ではなく、すべてのおとなたちが、子どもに対して「あなたはと思う」「どんなことでもいいから、おとなに言いたいことがあったら話してみよう」「つらいことやモヤモヤを相談して」と繰り返し子どもに伝え、子どもが安心して思いを伝える場をつくっていくということも意味します。子どもが性的にいやなことをされたり、自撮り写真を送ってしまったとき、悪いのは百パーセント加害者であり、その子どもには絶対落ち度はない、ということや常日頃から伝えておくことで、子どもは相談しやすくなるでしょう。いやなことをされそうになったときは、「ノー」と言っていって伝えることも大切です。子どもたちにこの社会をつくって

ていく、よりよく変えていくパートナーだと考えていることを伝えましょう。

いきなりこういうことを子どもに説明するのも難しいでしょうから、たとえば『世界の子どもの権利かるた』（合同出版）を使って遊びながら子どもの権利を子どもと一緒に考えることもできます。かるたのメッセージをきっかけに子どもの気持ちを聴くこともできます。

かるたで遊んだあとに、自分の気持ちを伝えるオリジナルかるたをつくってもらっているのですが、次はある子どもが書いてくれたものです。

「おこるときにきつく言われると心のしんからきずつくよ」

これは、かるたが促してくれた子どもの声の発信だと思っています。



作家と画家が であうとき 12

「雨ふる本屋」シリーズ



日向理恵子・作／吉田尚令・絵
2008年～2020年刊行

日向理恵子さんへ

吉田尚令

第一作目である『雨ふる本屋』が出版されたのが二〇〇八年。その頃、小学生だった子も今ではもうすっかり大人になっていて、「懐かしい!」とか「子どものころ大好きだったな〜」とか、そんな感想を見かけるようになりました。

「子どものころ好きだった」が、何より嬉しい感想です。日向さんも同じでしょうか?

「雨ふる本屋」シリーズは、現在までに続編を含め五冊刊行され、海外でも五カ国で翻訳出版され、広く読まれるシリーズになりました。制作者の誰も予期していなかった展開だったと思います。「雨ふる本屋」はとても幸せな作品だと感じています。

一作目の絵を描く上で参考にしたのは、ミヒャエル・エンデの『モモ』でした。ペン画の挿絵が合うと思ったし、「雨ふる本屋」を『モモ』のような趣のあるファンタジーの児童書にしたいと思ったのです。

いま改めて一作目や二作目を見返すと、絵が下手だし随分と粗いなーと思います。『モモ』を参

考に、つけペンでサツと描いたような挿絵にしたいという狙いがあったのですが、ただ、力を抜いてサツと良い絵を描くということが何より難しいことですから、なかなか自分の思い通りの絵になっていないように思います。巻数を重ねるごとに「雨ふる本屋」の挿絵に求められるものを、絵で表現せねばいけないことを、少しずつ理解しながら進んできたような気がします。

もちろん「雨ふる本屋」の世界は、日向さんがゼロから創造した架空の世界です。ですから、自分のことよりも、日向さんのイメージ通りの絵を描けているのか? ということの方が気になります。本当はもっとこうなんだ! というのが日向さんの中にはきつとあるんだろうなと。

下手で粗いと言った一作目ですが、あの荒さや稚拙さは逆に良かったのかもしれないとも思います。日向さんのお手紙のなかにあるような、「おらかさ」というものが、一作目のなかにたしかにあるように思います。

「雨ふる本屋」はこれからも続くでしょうし、まだ詳しいことは書けませんが、日向さんとは新しい物語の制作も進めています。子どもたちを夢中にさせるような児童書を、これからも一緒に作っていったら嬉しいのです。

(よしだひさのり／イラストレーター)

「あかちゃん とととと」シリーズ最新作!

『ごろん ごろごろ』

すてきな五文字が
親子の合い言葉に!

岩田亜紀

読みきかせでも大活躍の「あかちゃん ととと」シリーズ。これまでも何度か〇〇二歳児さんたちに読んだことがあります。中でも一作目の『ぼうしかぶって』は、お散歩でぼうしをかぶることの多い(嫌がる子も多い……)保育園生活でとくに身近で、先生方にも大人気。二歳児にもなると、なすのとうさんのかばんを見て「会社に行くんだね」とすぐに気づき、隣の子にささやいていたり、ミニトマトのあかちゃんがなすのぼうしをかぶろうとしている絵には「違っっ!」とクスクス笑い出す子も。そんなふうになさなところま

でしっかりと描かれているのが、このシリーズの人気の理由かもしれません。

テーマも「おふろ」「あいさつ」「かさ」など、子どもたちの生活に密着したキーワードばかり。寒い季節に「うちの子、最近なかなかお風呂に入りがらなくて」という困ったようすのママさんに『おふろにはいろ』をおすすめしたことがあります。後日、「なんと! 絵本のそらめさんのまねをして、『おふろにはいろ』と言いながらさげんで脱いでお風呂に入るようになったんです」との報告があり、二人でバンザイしたことも。大人だって自分の好きな音楽などで気分を上げるということがありますが、絵本から引用したユーモアと愛情ある言葉を好きな人が自分に向けてくれると、子どもの小さな心にちゃんと届き、がんばる力になると実感しました。

そして六作目となる最新作は、『ごろんごろごろ』。表紙の絵、タイトルの語感から絵本への期待が一気に高まります!

お気に入りのぬいぐるみを手には、いい夢を見られそうないちこのあかちゃん。ソファで横になって、なんとも癒しそうなバナナのとうさん。キャベツのかあさんは、少しお疲れのごようすで「ふわ〜」とあくびをしながらの登場。おしまいのみかんの家族の場面には、みんなでギュッと集まり、こたつでごろんとする心地良さと、楽しいオチが待っています。この、体中にじわ〜と染み渡る温かさは、この絵本のシリーズが持つ幸せそのものです。



『ぼうしかぶって』『おふろにはいろ』
『あさだ おはよう』『こんにち、わ!』『かさ さして』

「あかちゃん とととと」シリーズ
三浦太郎/さく・え 定価880円(本体800円+税10%)

野菜や果物そのもののようすも表しつつ、子どもたちを瞬時に惹きつけ、イメージを広げ、安心をもたらしてくれる「とととと」のような五文字の連続言葉も健在です。絵本を手にするそばから、きつと声に出してみたいくなることでしょう。

「ふわふわ!」「まままま!」! 普段の親子の会話の中に、こんなふうになさなところの共通の言葉を持つことができたなら、子どもと一緒に時間が今より、もっともっと楽しいものになると思います。わが子と自分を一瞬で結びつける心通い合う言葉は、きつとこんな絵本から生まれるんですね。読む人みんなを笑顔にする三浦太郎さんの絵本。また、新しい作品を手渡していけることがとても楽しみです。

(いわたあき/目黒のえほんやにじい書店店主)

11月の新刊図書！

単行本図書

空と星と風の歌

小手鞠るい／作

堀川理万子／絵

定価1430円（本体1300円＋税10％）



わたしが受けたいじめは母が韓国人である、ただそれだけの理由だった……。3つの短編が織りなす、差別のない社会を希求する力強い物語。

単行本図書

見て味わう×読んで知る 平安時代の古典と文化

川村裕子／監修

定価5940円（本体5400円＋税10％）



平安時代を舞台にした4つの古典作品を紹介。豊富なビジュアルとともに、原文を味わい、あらすじを知り、文化を理解できます。

読者の声

だいすき絵本

まこが、おねえちゃんに

なつた日！

かわしまえつこ／作
高橋和枝／絵

定価1320円（本体1200円＋税10％）



母親、父親、まこちゃんの心情を赤ちゃん誕生の流れ（時間経過）の中で共感を得ていく内容でした。大人から見てもほのぼのとしたタッチと文章に懐かしさを感じました。

（大阪府 T・N 六三歳）

とことこえほん
ぎゅっ だーいすき！

新井洋行／作

定価990円（本体900円＋税10％）



コアラの子どもがお母さんの背中にぎゅっつくつくと、娘は「くうん」といって本にチュッとします。娘なりに愛情を表現してくれているようで、とても嬉しかったです。「大好き」の伝え方を教えてあげられたような気がしました。

（東京都 R・W 四一歳）

せかいのあいさつ
せかいの「おはよう」

こがようこ／文

下田昌克／絵

岡本啓史／監修
定価1760円（本体1600円＋税10％）



園に登園している外国籍の保護者にこの絵本を見せると、大変喜んでいました。言葉の壁をこえて、このような絵本を通して交流できて、とても良かったです。

（福井県 Aこども園）

童心社の絵本
なきむしせいとく

沖縄戦にまぎこまれた少年の物語

たじまきひこ／作

定価1760円（本体1600円＋税10％）



私は沖縄出身です。私の両親、祖父母、兄もこの戦禍に巻き込まれ、祖父と兄を目の前で亡くしたそうです。この夏、二回目の平和の碑へ行き、刻まれた名前を指でなぞりました。大人、子ども、孫、知人、政治家に読んでもらいたい。田島先生、ありがとうございます。

（鹿児島県 Y・N 六五歳）

あとがき

●8月以降、紙芝居講習会でいろんな町に出かけました。石川県中能登町、茨城県龍ケ崎市、福島県本宮市、愛知県東浦町、三重県松阪市etc…。講習会を通じて改めてもう一度紙芝居と出会い直し、紙芝居の力を確信し、それぞれの土地で子どもたちに紙芝居を演じて、楽しい時間を届けようと考えている皆様は、私たちにとても大切な仲間です。 H

●「忘却の次の虐殺を準備する」という言葉を耳にしました。昨年から続くロシアのウクライナ侵攻に加えて、イスラエルとハマスの紛争が勃発してしまったことに、非常に胸を痛めています。今、日本にいる私たちには、事態を正しく知ることが求められるように思います。どのように忘却に抗うのか、日々考えていかねばなりません。 N

2023年11月15日発行（毎月刊）

母のひろば 第714号
定価50円（年600円／送料とも）

発行所：童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話：03（5976）4181
03（5976）4402（編集）
編集発行人：橋口英二郎
童心社のホームページ：
<https://www.doshinsha.co.jp/>
デザイン：坂本梓 ロゴ：谷口広樹

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌（無料）と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。購読料金は1年分600円（送料とも）。

